MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM
松本清張記念館
特集号
2025.3

令和6年度 中高生読書感想文コンクール

感想文紹介

最優秀賞（中学生の部）

※通常1名の予定を、本年は2名にしました。

題

善と悪のきわどさ

課題作品

左の腕

田中 芙香（たなか ふうか）
福岡大学附属大濠中学校
2年

正義をきどる悪人、悪の古疵をもった善人。この物語では、善と悪について考えさせられた。

卯助の古疵とは、腕に入れられた墨の桝形が象徴する過去である。対する麻吉の職業の目明しとは、江戸時代、町奉行の与力や同心に私的に雇われ、その手先となって犯罪人の捜査、逮捕に従事した者のこと。本来は悪を取り締まるべく奔走する正義の味方のはずだ。しかしこの麻吉は、自分勝手でどこまでも強欲な人物である。悪が実は善で、善が実は悪。善と悪の逆転がそこにある。

麻吉は、強欲がゆえに事件に巻き込まれ、卯助に助けられる。ここにも、善と悪の逆転がある。本来は犯人を捕まえるべき麻吉が、悪の古疵を持つものに助けられるのだ。

今、SNSでは、なにか問題があると、正義感から誹謗中傷をする人が多くいる。過去の過ちをほじくり出し、皆で責めて、排除する。私も、はじめは批判の声に頷く気持ちがある。しかし、途中から違和感を覚え始めることが多い。それを見る度に、簡単に善が悪に変わる様を見ている気がする。

善と悪は、表裏一体である。善は常に善ではないし、悪もまたそうだ。善を求めるのが正義感だとすれば、その正義は、本当の正義かどうか、自分自身で検証し続けなければいけない。

分別や良識という善人の顔をして、私たちは人を色眼鏡で見てしまう。それは、自分を守りたいためなのかもしれない。卯助が言った、「子供は飴の細工だけをみている」という言葉は、そういった世間の目に対してのことだろう。

卯助は、左の腕の古疵を隠し続けてきた。娘に一度も見せたことがない、というほどだ。自分だけでなく、娘のことも世間の目から守りたかったのだろう。卯助の左の腕の布を、麻吉は執拗に取って見せろと言った。卯助の秘密を暴き、娘もろとも、上に立ちたかったのだろう。

罪を犯した過去、人に知られたくない黒歴史、それを持つものは、そこからずっと悪なのだろうか。それを暴き、排除しようとする正義は、それもまた悪ではないのか。罪を犯した者が、前に進める未来をつくるのが正義だ。正義が悪に変わるのは、弱さからなのかもしれない。そこに優しさがあれば、方向を間違えにくくなるのではないだろうかと思う。

卯助は、過去の古疵をなかったことにして、その後を生きようとした「迷いの夢」を捨てた。どしゃぶりの外、すなわち世間に、古疵を見せて歩こうと決意する。そうしなければ、世間に負ける前にすでに自分自身に負けている、そういうのである。

今まで頑なに隠してきた過去、自分の過ちを隠さず、それもまた自分自身だと認め、胸をはって生きていくと誓う卯助は強い。私もそうありたい。そして、自分の正義を自分自身が裏切らないように強さと優しさを身に付けたいと思った。

雨がやんで、晴れ間がみえる心地いい季節になってくれていることを願う。

最優秀賞（高校生の部）

※通常1名の予定を、本年は2名にしました。

題

心の闇

課題作品

共犯者

吉田 桜（よしだ さくら）

学習院女子高等科
1年

この作品の主人公は、過去の銀行強盗で得た資金を元手に、社会的成功を収めた実業家だ。彼は、当時の共犯者の手により、成功の背景にある自身の悪事が暴かれるのではないかと不安になる。姿が見えぬ「共犯者」に次第に追い詰められ、最後は破綻に至る。作品を盛り立てる、人間の疑心暗鬼、私利私欲、心の闇が、徐々に変化する描写に息をのんで引き込まれた。

主人公は、過去に強盗を犯した罪悪感により、少しずつ破滅に追いやられる。そして、その心情の変化が、一人称で語られる。罪悪感から破綻に至る物語は他にもある。ドストエフスキー「罪と罰」、エドガー・アラン・ポー「黒猫」などがその例だ。しかし物語全体に感じる重い空気、深い闇は「共犯者」特有だと感じる。私が思うに、それは当時の日本の時代背景が影響しているからだろう。この作品に限らず、松本清張の作品には、物語のベースとなる当時の社会背景が非常に重要だ。特に、「共犯者」は作品そのものとしてはもちろん、当時の日本の政治・経済を知る情報としても、興味深い。「共犯者」が出された1956年は高度経済成長の兆しが見える頃で、日本社会の変動や、経済成長に伴う格差が生まれた時代だ。戦争直後の苦しい状況から這い上がり、復興に向けて経済は上向いていく。しかし、その勢いに人々の道徳観や社会の仕組みが追いつかないところに闇が生まれる。こうした当時の社会的背景があるからこそ、作品のプロットが生きてくる。

この物語の魅力は、時代と心情を表現した緻密なプロットだ。主な登場人物は、主人公内堀彦介と「嘱託記者」の竹岡良一の二人のみだ。その竹岡も、姿を見せるのは最後のシーンのみである。物語のタイトルである「共犯者」である町田武治は、物語のきっかけを作る重要な役割を担うが、最後まで姿をみせない。物語はほぼ、内堀と竹岡のやり取りと内堀の一人称での心中の描写のみである。内堀は、心の中にある罪悪感を発端に、敵はいないのに、自らの不安でがんじがらめになる。罪悪感は消えてなくならない。影のように、常に付きまとい、逃げられない悲劇を生み出す。心の奥深くにある罪の意識が、時を経て芽を出す。それは、社会的な成功を収め、家族を持ち、守るものが多くなったからこそ芽生えた不安である。社会的な成功を収めたとしても、人間は常に何かしらの不安や葛藤を抱えて生きる。その内面的な弱さが、時に犯罪や破滅へと導かれることがあるという清張の視点は、時代を超えて今も共感する。時代や社会が変わっても、人間の内面、特に弱さは変わらないことを学ばされる。

作品後半、町田が徐々に内堀に近づくと虚偽の報告を受けるシーンの描写に引き込まれた。内堀の一人称での表現方法は、読者に緊迫感を与える。福岡にいる内堀のもとへ、千葉から町田が近づいてくるという虚偽の報告を受ける。距離が縮まるにつれ、不安と焦りで我を失う内堀の心中を表現するように、文章は次第に短く、シンプルに、流れるように淡々と進む。小気味よい短文により、読者はクライマックスに向けて、一気に引き込まれる。

そしてその後、竹岡が登場する場面も印象的だ。これまで内堀と共犯者町田の間で隠し通した過去の過ちが、全く事件に関係のない第三者長岡の手により、実に冷静かつ現実的な方法で暴かれる。それまで一人称で語られていた文章は、ここで竹岡視点に置き換えられる。

内堀が疑心暗鬼にならなければ、嘱託記者が竹岡でなければ、竹岡が勘が良い人間でなければ、良くも悪くもこの結末はなかった。数年前の強盗事件の犯人が逮捕に至ったにも関わらず、読後感はすっきりしない。感じるのは、世の中全ての脆さ、はかなさ、人の努力ではどうにもならない宿命、そして人間の心の闇だ。人間は意外に、他者より、自分自身の心に巣を持つ、不安や疑念、嫉妬、憎悪に自ら苦しんでいるのかもしれない。自分自身に置き換えてこの物語を理解した。私が日々感じる不満や不安は、もしかしたら自分自身が生み出した闇かもしれない。

優秀賞（高校生の部）

題

善悪と損得

課題作品

共犯者

広瀬 綾（ひろせ あや）
筑波大学附属高等学校
2年

私は後悔していた。高校生になり読書量が激減した。中学校では禁止されていたスマホを使える生活だ。電車通学の時間が本を読まずに惰性でスマホをいじるようになっていた。部活二つに習い事もあり毎日ヘトヘトだ。そのまま眠ってしまい、最寄り駅を大きく寝過ごすことが幾度もあった。ある日ハッと目を覚ますと、何県かも分からない駅だった。夕暮れに広がる街ではない景色。スマホの中にはない、本の世界だ。そう思った。本を読まなくては、とその晩本棚から手に取ったのは、松本清張の短篇集だった。

意外に思った点がある。主犯が主人公ではなかったのだ。題名が『共犯者』であり、犯行仲間を「協力者」「助力者」と表していたので、主人公の彦介が主犯だと思った。ところが物語が始まってすぐに、計画と実行をしたのはもう一方の町田であり、「彼が主犯ということができる」と記されている。しかも、銀行員を刺して瀕死の重傷を負わせたのも町田であった。明らかに罪は町田の方が重そうだ。それでも、彦介側から語られている構成から、善悪とは別の主題がありそうだと考えながら読み進めた。

犯罪で得た資金から商売で成功し、金と信用と地位を得た彦介の心中を襲うのは、かつての共犯者から脅迫され、財産が枯れるまで恐喝されるという恐怖であった。自分が安定した状況になった時に、過去の犯罪に罪悪感を抱いたり、重傷を負った銀行員を案じたりといった境地にはなっていない。善の心の要素は一片もうかがえず、悪が過去の事として固定化しているようだ。自分の保身のためだけに恐怖から逃れようとしている。

その最大のきっかけは、自分が愛人をもったことだろう。犯行直後に「ふと覚えた不安な予感」から、彦介は町田に今後の行動を慎むように忠告する。しかも「ことに女はいけない」と自分から言っている。それに対し町田からも「あんたこそ、気をつけなよ」と警告を受ける。この時の不安な予感が、自分自身に対して予言のように彦介の深層に呪いをかけたようだ。破綻の確率を低くするために余計なことはしないという損得勘定ができていたのに、愛人を持ったことで予言通りに落ちていく。その彦介の姿から善意ではない主題として損得が浮かび上がってきた。

彦介の行動はどんどん視野が狭いものになっていく。町田の消息を知るために、当初は毎日の新聞を熱心に読んでいた。この頃は全力で商売に打ちこんでいた時期で、世間のことも広く見えていただろう。しかし、愛人というトリガーによって、電話局へ問い合わせをし、次には見張り役として偽の通信記者まで雇ってしまう。情報の入手経路が狭く一方的なものになっていく経緯は、追い詰められているというより自ら深みにはまっている。通信員から送られてくる偽りの近況報告から町田は没落し、彼の転居が徐々に自分に迫っていると知り自分の頭の中だけで完結して狭窄状態に陥ってしまう。それは、手紙の消印がおかしいことにも気づかないほど切迫し、もう何の判断力も働いていない。彦介を血眼になって捜している想像の町田は、彦介自身の姿である。

物語の銀行強盗がこの時代だから簡単にできたとは思えない。今も毎日のように強盗事件が報道されている。ネット社会の今、共犯者も簡単に募ることができる。顔も合わせず郷里どころか本名も知らない者同士で殺人まで犯す。善悪を考える余地もなく、スマホの小さな画面を見つめ、わずかな得を求める。そこに大きなリスク、損があると想像しなかったのだろうか。

彦介が汽車の中でも仕事をしていた冒頭の場面を思い出す。私がこの小説を読むきっかけは電車の寝過ごしだった。かつての彦介はそのようなこともなく車内でも勤勉であった。逮捕された後、彦介はどの時点の自分を思い起こしたであろうか。私は見張り役など雇わなければよかったと考えたとは思わない。それよりは犯罪以前の自分、あのままコツコツと働いていればと後悔したと思う。人間には善意の境い目を見る力は備わっていると考えるからだ。ここで、損得との関係を改めて考える。損得というと金銭的欲の計算のようであるが、善悪を補完する材料になると思う。善から外れそうな時も抑止力としての損得勘定をして踏みとどまり、先を拓くことができる。

自分は来年成人になる。大人とはなんだろうか。まだ学生で自立は少し先になりそうだ。ではどのような人に成りたいかと自問する。現時点では自律した人間になりたい。大人の初心者である私たちは経験値が低い。情報過多の時代に判断基準となるものさしが小さく薄く頼りない。そこで視野を広く持ち、本を読み、善悪や損得やその他多様な捉え方を学びとりたい。そうして自分を律する人間力を内側に涵養していきたい。

優秀賞（中学生の部）

該当なし

佳作

中学生の部

川本 理咲子（かわもと りさこ）　白百合学園中学校 3年
題　疑心暗鬼は残り続けるか（共犯者）

多田 芽衣紗（ただ めいさ）　白百合学園中学校 1年
題　異なる視点の先に見えるもの（遠い接近）

山本 凜（やまもと りん）　筑波大学附属中学校 1年
題　人生について考えさせられた一冊（左の腕）

畑中 美波（はたなか みなみ）　福岡市立高取中学校 3年
題　戦争が変える「人」（遠い接近）

吉岡 紗那（よしおか さな）　白百合学園中学校 2年
題　清張の視点から戦争の残酷さを考える（遠い接近）

山中 こはな（やまなか）　福岡大学附属大濠中学校 3年
題　勧善懲悪は綺麗事か（共犯者）

高校生の部

江﨑 結維（えざき ゆい）　福岡県立筑紫丘高等学校 1年
題　共犯者（共犯者）

熊川 眞子（くまがわ まこ）　福岡県立小倉西高等学校 1年
題　罪と嘘（共犯者）

田中 優璃（たなか ゆうり）　福岡県立小倉西高等学校 1年
題　「共犯者」を読んで（共犯者）

第23回目となる令和6年度の読書感想文コンクールには、全国から305点の応募がありました。令和6年11月21日の最終選考で受賞者が決定し、最優秀賞については令和7年2月22日に松本清張記念館で表彰式を行いました。

選考委員紹介

（五十音順、敬称略）

田中 光子　株式会社文藝春秋「文學界」編集部編集委員
十重田 裕一　早稲田大学文学学術院教授
藤井 康栄　松本清張記念館名誉館長

審査講評

選考委員　田中 光子

今年の課題作は、短編サスペンス「共犯者」（初出「週刊読売」一九五六年）、『無宿人別帳』より「左の腕」（初出「オール読物」一九五八年）、長編推理小説「遠い接近」（初出「週刊朝日」一九七一～七二年）の三作である。現代を舞台にした青春小説を読むのとは異なり、書かれてから五十～七十年経った作品を理解するには、調べなければならないことも多かったはずだ。その上で、それぞれが学校生活で悩んだことや、強く印象に残った出来事と結びつけながら書かれた、素晴らしい感想文に今年もたくさん出会うことができた。

「左の腕」を読んで、田中芙香さん（福岡大学附属大濠中学校二年）は、過去に罪を犯した証の入墨を隠して実直に生きる卯助と、犯罪を取り締まるべき立場なのに、その力を私利私欲のため利用する目明かしの麻吉の対比から、SNSで起きている「正義感」からの誹謗中傷を想起する。過去の過ち、過去の自分を隠そうとしすぎれば、自分が自分に負けてしまう――清張のメッセージを誠実に受け取め、「強さと優しさを身に付けたい」と結ぶところに希望を感じた。

「共犯者」を選んだ吉田桜さん（学習院女子高等科一年）は、本作が発表された時代を「復興に向けて経済は上向いていく。しかし、その勢いに人々の道徳観や社会の仕組みが追いつかないところに闇が生まれる」とまとめた上で、時代が変わっても人間の内面、弱さは変わらない、と結論づける。清張作品が今なお、私たちを掴んで離さない理由が、端的にここに現れている。徐々に緊迫感を増していく文体の分析も見事だった。

以前、最優秀賞に選出されている広瀬綾さん（筑波大学附属高等学校二年）は、高校生になって読書量が減ってしまった、部活の疲れで電車を寝過ごしてしまった、というのだが、それが「共犯者」の感想を書く上での伏線であったことに驚かされた。小説の主題として「善悪」だけでなく「損得」という評価軸もあると見抜いたうえで論を進めるところもさすがの力量であった。

「遠い接近」にも、優れた感想文があった。清張自身の軍隊生活が反映された重厚な長編にチャレンジされた方々にも大きな拍手を送りたい。

イラスト：山藤　章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
https://www.seicho-mm.jp
制作（株）エディックス

●開館時間　午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
●休館日　毎週月曜日（休日の場合は翌日）、年末年始（12/29～1/3）、館内整理日
●観覧料　一般／600円（480円）　中・高生／360円（280円）　小学生／240円（190円）　※（　）は30人以上の団体
●アクセス　JR：小倉駅から徒歩20分　西小倉駅から徒歩10分
小倉駅からバスをご利用いただくと便利です（小倉城・松本清張記念館前下車）
車：北九州都市高速 大手町ランプより5分